戦争体験記

友野麗子
江原町三丁目

戦争の悲惨さを八月十五日の終戦記念日に、テレビ・ラジオで放映されていますが、涙ぐんで聞いている女学生の画面を眼で追いながら、私は心の中で「貴女方は幸せよ」と何度思ったことでしょう。昭和一桁生まれの人達は戦争の体験者ですが、私もそのひとりです。昭和十八、九年頃は、学徒出陣で男子として生まれてきた以上はお国のために命をかけて戦った。そして大勢の人達が犠牲になりました。丁度その頃、長姉が初産で母が上京する予定でしたが、あいにく突然祖母が倒れ、やむなく私が十六歳で生まれて初めて東京に行くはめになりました。

大きなリュックに栄養になる食品を母が詰め込んで、「少し重いけど頑張ってね」と両手に風呂敷をぶらさげ、鹿児島駅にやっとの思いで着きました。母が見送ると言ってくれましたが、祖母が心配だったので断りましただけに、ほっとしましたが、駅に入ってみると人、人で一杯でした。大阪・東京へ行く人達、陸軍の兵隊さん、海軍さん、航空隊の、そして婦人会の白たすきがけのお見送りの人達でごった返していました。切符は何日か前に証明書で買ってありましたが、乗客の方が多くて指定されていた列車にも乗れないことになりました。大きな荷物をぶらさげている私は、泣きそうになってうろうろしておりましたら、厚木の基地に帰ると言う若い将校さんが、荷物を持って下さって私を引っ張って強引に列車に乗り込みました。席は三人がけで、私もどうにか腰掛けることが出来ましたが、体は重ねたような状態ですし、足も荷物の上に置くようなありさまで、網棚はぎっしりで上から落ちてくるのではないかと心配になるほどでした。もちろん通路まで荷物があり、そのすきまに人間の足、足。息むれと汗と埃が臭い。二月上旬というのに汗びっしょりでした。おまけに山口県あたりでは敵機が来襲し、トンネル内で列車は停止。その夜は蒸風呂列車の中。電球は小さくて薄暗く、トイレに行きたくてもじっと我慢しました。一睡も出来ないまま、明け方列車が動き出しました。どの人の顔も煤で真っ黒でした。やっとはい出してトイレにいきましたが、洗面所まで人と荷物が重なっていました。朝も昼も夜も、水も飲

まずおにぎりも食べませんでした。何両目からか赤ちゃんが生まれたとのことで列車が三分ほど停車して、またすぐ動き出しました。大変だなあと思いました。もう一泊列車に泊まって行かねばなりませんので、少し眠らなくてはと目をつぶって努力しましたが駄目でした。将校さんも目をつぶり、腕組みして微動だもしませんでした。

突然お腹が無性にすいて、私はリュックの中から母が作ってくれた十個のおにぎりを竹の皮から取り出しました。ぷ～んとすえたご飯の臭いがしました。中に梅干しが入っていましたが、むれて糸を引いていました。ベタベタしたそのおにぎりを、空腹をまぎらすために一個食べて、リュックの中に戻しました。長い長い夜も明け、静岡あたりで将校さんは、「もうそろそろだぞ」と言いながら、「洗面所に行く」と言って立ち上がりました。薄黒くなった顔にひげが伸びていました。「ああさっぱりした」と将校さんはにこにこしながら、「そろそろお別れだ。元気でね」と言って横浜駅でお別れしました。

私もくたくたになって姉宅へたどり着きました。リュックの中のお土産は大半腐っていましたが、おにぎりも水洗いしておかゆにして食べました。「ご馳走だわ」と言って喜んで食べました。その夜は死んだように眠りました。「空襲も今夜はこなかったわ」と言うのもつかの間、それからは毎晩のように空襲警報で洋服を着たまま寝るのが日課でした。姉が無事出産し、女の赤ちゃんを抱えて義兄と一緒に家に帰ってきてから一週間位した三月九日の夜、警報と同時にバン、バン、シュー、シュー、バアンと炸裂した音がして急に一面明るくなりました。浅草、上野は火の海でした。義兄も姉も、赤ちゃんも、私も、ずきんをかぶって外へ逃げ出しました。姉の家も火に包まれました。どうやって上野駅の地下道にたどり着いたのか、夢中で覚えていません。地下道はシャッターが締まっていましたが、それでも布団を持った人やら、家財道具を持った人達で満員でした。私もヤジキタのように、両肩両手に米やら味噌、鍋を持っていきました。義兄も姉も目一杯荷物を抱えて火の中をくぐり抜けて逃げて来ましたが、地下道はさすがに三月の寒気が体を震えさせました。義兄が持ち出した布団にくるまって、大勢の人のざわめきで眠れぬまま、将校さんが声を殺して話してくれた言葉を思い出しました。「自分は学徒で、同じ大学の友が九州の人間で知覧航空隊に配属され、明日出陣で今生の別れに酒を飲んで来た。ガソリンもなく片道切符の体当たり。日本も終わりだ。『自分もすぐ追いかけるぞ』と言って別れて来た」と。

三月十日の朝が明けて、地下道から皆ぞろぞろ外へ出ました。私達も出たら上野近辺はお山にも人がぞろぞろ、遠くまで見渡せるほどでした。浅草方面に逃げた人達は、熱さで隅田川に飛び込んで沢山死んだとのことでした。

いま姉のあの赤ちゃんは四八歳で、スイス人と結婚して二人

のお母さんです。結婚二三年目とかで、昨年の夏も夫婦で里帰りしました。あの火の海をくぐり抜けた赤ちゃんが、と、その時思いました。姉も二、三回スイスに行ったり来たりして、今は幸せだと言っています。平和は本当に有り難いです。そして、あの若い将校さんの姿がいつまでも私の心に残っています。私も六三歳。平凡でも静かに人生を過ごさせていただけるだけで、平和って素晴らしいと思っています。

合掌